様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	人間形成コース／梶井　一暁

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1．目標・計画

人間形成文化史研究の観点から、寺院と僧侶の教育社会史の研究を計画している。現在、このテーマに関連した研究として、「国語史資料・学習史資料開発のための近世地方寺院伝存文献の調査研究」を原卓志教授と共同で行っている。これを発展させて如上の研究を実現したい。

2．点検・評価

①平成25年度の科学研究費補助金（基盤C）について、研究代表者として新規申請した。本研究では、宗教史と教育史を架橋する人間形成文化史の主題を開拓することをめざしている。
②平成25年度の科学研究費補助金（基盤B）について、研究分担者として新規申請した。本研究では、比較教育風俗研究という観点から、教育における場の当事者性に関する共同分析を進める計画である。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

1．目標・計画

①大学（とくに私立大学）を訪問し、大学院案内・募集活動を行う。
②コースのパンフレットを教育学等の教職課程担当教員（就職課等の事務宛ではなく）に送付し、コースを具体的にアピールする。
③コースのホームページを改善するとともに、検索ページにホームページを登録し、学生の検索に当たりやすいように工夫する。

2．点検・評価

①大学院生募集のため、複数の私立大学を訪問し、説明会を開催した。訪問校から複数の受験者を得ることができ、また入学手続きをとるにいたった。
②コースのパンフレットを改訂するとともに、訪問先大学の複数の教員（学部長、学科長、教職課程担当教員など）に面会し、直接、本学の魅力を訴えた。結果、大学院受験者を得ることができた。
③学生がよく利用するサイトに着目し、コースのキーワードを登録した。yahoo検索で「人間形成コース」は本コースがトップに挙がり、受験生へのアピールになった。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①学生の理解度と関心の所在を把握して授業を進めることに努め、授業に対する意見や質問を記すカードを作成する。カードは授業改善のための資料として役立てる。
②地域文化（とくに四国遍路）を活かした授業実践を試み、学生への特色的な授業提供に取り組む。
③学生の進路相談に積極的に応じ、とくに教員採用試験対策の指導（面接・論作など）を行う。

2．点検・評価

①前期では学部「人間形成原論」と大学院「人間形成文化史研究」、後期では学部「学校と人間形成」で授業カードを作成・活用し、受講者の理解度を確かめながら授業を運営・構成した。授業カードは次の週の授業の導入におけるコメントにも役立て、授業を繋ぐツールとしても機能させた。
②大学院と学部で四国遍路歩きの体験的授業を2泊3日で実施した。リピート履修者もあり、評判を得た。また、特色ある授業として徳島新聞の取材も受け、広報に資することができた。
③教員志望学生や博士課程進学希望者に対し、積極的に相談に応じ、対策・指導を行った。教職就職者に加え、博士課程に進む学生を輩出でき、進路ニーズの広がりを支えることができた。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

①教育と宗教に関する研究を進め、学会や研究会で報告し、論文にまとめる。
②科学研究費補助金・基盤研究C「国語史資料・学習史資料開発のための近世地方寺院伝存文献の調査研究」の研究分担者として、教育史の観点から寺院所蔵資料を調査研究し、一次資料を見いだす。
③海外の教育学研究の成果を検討し、優れた著作の翻訳作業を進める。

2．点検・評価

①研究の成果の一部を教育史学会（全国）で発表した。また、論文を寺院系専門誌の『寺門興隆』に発表した。
②旧飛騨国と安芸国の寺院に伝存した一次史料を調査し、江戸時代の寺子屋（手習塾）の指導で使われたテキストや課程書について分析を進めた。
③教育史家ロイ・ロウ教授によるイギリス進歩主義教育に関する著作を共訳中であり、現在、最終校正の段階である。2013年4月公刊の予定である。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

①大学院入試委員会委員や地域連携委員などとして、大学運営に貢献する。
②第5回中日教師教育学術研究集会の成功に向けて尽力する。

2. 点検・評価

①大学院入試委員、地域連携委員、ハラスメント相談員などに加え、大学機関別認証評価委員としても大学運営に貢献した。
②中日教師教育学術研究集会の実行委員として、9月の北京師範大学における大会の開催と成功に役割を果たすことができた。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

①地元の学校教員と連携し、地域の文化や伝統による人間形成作用に関する共同研究を進める。
②報道機関の教育文化事業に協力し、新聞の教育欄への記事提供を行う。
③外国人留学生の研究指導を行う。

2. 点検・評価

①那賀郡の中学校教員とともに子ども四国遍路歩きに関する実践的な研究を進め、成果の一部を仏教教育学会（全国）で発表した。
②岐阜新聞の「中学生の広場」に教育関連コラムを執筆し、6本が掲載された。これまでに執筆したコラムを整理・編集し、本にまとめる相談を進めている。
③中国からの留学生2人（修士課程）を指導し、修了に導いた。1人は帰国して専門学校で教職を得る見込みであり、もう1人は博士課程進学が決定した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）

①9月に北京師範大学で開催された中日教師教育学術研究集会に実行委員および研究発表者として出席し、大会の成功に対して微力ながら役割を果たすことができたと考える。大会プロシーディングも作成・発行される予定なので、論文を投稿し、研究成果を日中に積極的に発信したい。
②特色ある学生教育の展開のため、四国遍路を活かした教育実践を推進した。学部・大学院を貫通するプログラムとして遍路体験授業を、共同授業担当者と協力しながら、設計・実施できた。また、公開講座として市民向けの遍路も行い、現場で学生が実践力を磨くため、この講座に学生を市民・子どもの歩きサポート役として参加させ、学生の指導力の育成につなげた。
③教育史テキスト『日本の教育史』を分担執筆し、担当した「中世」の叙述では、従来はあまり注目されてこなかった教育に対する宗教（者）の役割について、これを再評価する観点から、新しい考察の展開を試みた。
④大学機関別認証評価に向け、山下主査、梅津総括者のもと、WG主査の1人として、報告書の草稿作成に尽力した。